

付録 レポート作成例

2013 年度 全学教育科目授業  
「レポート力」アップのための情報探索入門  
最終レポート

八百長を排すると大相撲の文化が損なわれるのか  
扱う問題

－大相撲の複層的構造から考える－  
着眼点

提出日 2014 年 1 月 30 日  
担当教員 柳澤輝行 先生 他

文学部 1 年 B3LB●●●●●  
氏名 はぎのすけ

## 1.はじめに

2011年2月に、大相撲の取り組みにおける白星の売買、あるいは取引（以下、八百長）が行われていたことを示唆する新聞報道があった<sup>1</sup>。勝敗を競うスポーツの存在にとって、八百長は致命的な行為である。当然この大きなスキャンダルへの批判が高まったが、例えばスポーツライター玉木正之によるウェブサイトの記事<sup>2</sup>のように、八百長を擁護する、あるいは八百長を問うこと自体が「ナンセンス」という声も少なくなかった。

文献の  
存在を  
示す引  
用方法

八百長擁護論の多くは総じて、大相撲はいわゆるスポーツではないとし、大相撲界全体が文化的見世物なのだとする。大相撲世界の文化を楽しむ人々にとっては、時に八百長が行われるとしても、それは目をつぶるべきものであったり、義理人情として味わうべきものであったりする。八百長問題について改革を断行することは、スポーツとしての要素のみが重んじられ、大相撲の文化としての重みを致命的に損ないかねないという論調である。

何を  
前に  
して

一方で、大相撲は個人優勝制度や、先進的といえるビデオ判定を取り入れており、勝利を追求することを大前提として競技するスポーツの体を成している。スポーツに八百長は許容できないものであり、八百長を容認するような場合は、大相撲のスポーツとしての面は死ぬことになる。

扱う  
問題

果たして、大相撲が文化であることとスポーツであることは両立せず、八百長を排すると大相撲の文化が損なわれてしまうのだろうか。もし八百長を排しても文化的側面が損なわれないことを証明できたとすれば、大相撲は八百長を排した上でスポーツとしての良さを高め、より豊かな存在として発展していくことができる。

問題  
意識

着眼点

八百長を排すると大相撲の文化が損なわれるという意見は、大相撲のスポーツ的要素を、勝敗だけを追求するものとして一面的にとらえることによって生じている。しかし大相撲が複層的構造を持ち、大相撲のスポーツ的要素もまた複層的であるとする、たとえ八百長を排しても、大相撲の文化的側面が損なわれることはないだろう。

本レポートでは、現在の大相撲を構成する要素を改めて確認することで、八百長を否定することは、大相撲の文化としての良さを否定することではないということを明らかにしていきたい。

何を  
やる  
のか

論  
理  
展  
開

## 2.どのような点で対立するのか

### 2.1 八百長はスポーツの存在理由を脅かす

はじめに、一般的なスポーツと八百長の関係について考えてみたい。

川谷によれば、『強さ』が試合の勝敗によって決定されるという思想こそが、スポーツの根本的な思想<sup>3</sup>である。その場合、『競技そのものは、勝利ではなく勝敗の決定という価値を目的として持つ』<sup>4</sup>ため、スポーツでは「強さの比較という競技そのものの目的が、競技者に対して、勝利の追求を目的として課する」<sup>5</sup>と述べている。川谷が述べる競技の目的を揺るがす八百長は、スポーツの存在理由に致命的なダメージを与えるものであるといえるだろう。

引用文が  
短い時の  
引用方法

では、大相撲はスポーツと言えるのだろうか。中世には勸進相撲といわれ、神社仏閣への寄進を募る目的で競技が行われた大相撲も、今日ではプロスポーツとして発展を遂げている。長らく個人の成績に対する顕彰制度は存在しなかったが、現代の大相撲は公式に個人優勝制度を確立しており、先進的にビデオ判定を導入して勝敗の決定に厳密を期している。大相撲における試合（取組）は勝敗を明らかにするために行われ、力士は勝利を追求するという体制が確立しており、十分にスポーツの体をなしているとみなすことができる。

## 2.2 八百長を擁護する思考

上記のように大相撲はスポーツとしての体裁を整えている。とすれば八百長はやはり存在してはならないものなのであるが、テレビや新聞といった大メディアにおいてさえ、八百長を擁護する、あるいは消極的に許容する意見が散見された。そうした意見は、どのような理由から可能になるのだろうか。

要約して  
引用する  
方法

そこには中島隆信の述べるように、独特の慣習や伝統まで含めて大相撲の世界全体が「文化遺産のようなもの」<sup>6</sup>だとする考えがある。中島は、大相撲を他のスポーツから差別化し、個人主義的な競争をある程度に制限することは合理的であるとしている<sup>7</sup>。それは、八百長対策を含めた大相撲界の構造改革について、それを断行することによって公正な勝負というスポーツの面だけが重視され、大相撲の文化的部分が今後軽んじられてしまうことを嫌う考えである<sup>8</sup>。



2.2 は、問いに対して引用で答えている印象を、読者にもたれてしまう。  
引用を行っても良いが、必ず自分の考察を述べるようにしよう。

## 2.3 大相撲のスポーツ的要素

八百長をあってはならないこととする考えは、大相撲をスポーツとして見ることにより生じる。しかし勝利の追求というスポーツの側面がある一方で、「立ち会いの変化やはたき込みなどが減り、土俵際での逆転など面白い相撲」<sup>9</sup>というように、ただ勝つことが良いこととされないのも大相撲である。不意打ちのような形の取り口は、例え勝利しても批判されがちなのが大相撲の特徴だ。そうした特徴は、大相撲のスポーツ的要素が、勝利の追求だけでは表せないことを示唆している。

ただ勝つことが良いこととされない場合に、よく引き合いに出されるのは「相撲の型」や「いい相撲」というものである。不意打ちや奇襲のような戦法は確かに時には有効である。しかし長いスパンで見てもより多く勝利するには、しっかりした相撲の技術が必要とされるだろう。「相撲の型」や「いい相撲」は、長い歴史の中で淘汰・蓄積されてきた、相撲の技術体系を表現することであると考えられる。よって大相撲の試合においては、一刻の勝利で証明されるその場限りの強さよりも、相撲の技術体系の表現を通じて、より安定的・絶対的な強さを証明することが求められているのだといえる。

この点から、大相撲のスポーツ的要素は決して単なる勝利追求にとどまらず、より洗練された強さの表現に重要性があると考えられる。

### 3.大相撲の複層的構造

#### 3.1 相撲4層という視点

2.2の中島の考え方によると、八百長を批判する側と擁護する側は、大相撲はスポーツなのか文化なのか、という問題を孕んで対立しているように見える。しかし大相撲のスポーツ的要素が、必ずしも中島が主張するような単なる勝利追求ではないのは2.3で考察したとおりである。さらに新田一郎は「相撲とは何か」という問いに対して、要約すると以下の4つの層の重なりとして説明している<sup>10</sup>。

- ・第一層：「相撲」の語源「すまふ」（争う、抵抗する）に由来する、原義としての「力くらべ」「格闘」そのもの
- ・第二層：現代の「相撲」の競技ルールを遵守する範囲で展開される競技
- ・第三層：「相撲の型」という技術体系の实践、技術的な意味での相撲らしさの表現
- ・第四層：格闘競技としての要素以外の、「相撲」を装飾するさまざまな文化装置

要約して  
引用する  
方法

もう少し詳しく説明をすると、第一層は「（平安時代の年中行事である）相撲節以前、各地でそれぞれに行われていたであろう『相撲』は、この第一層の意味において、『相撲』として括ることができる」<sup>11</sup>とされる。

また第二層は

長文の引用方法

『土俵』という競技場で、裸体にマワシを締めた徒手空拳で、『土俵外に体の一部がつく』か『足の裏以外の体の一部が土につく』ことによって勝敗を決し、（略）、一定の「禁じ手」を用いることを禁止する。こうした極めて単純なルールのもとに展開される競技が、第二層の『相撲』の意味である<sup>12</sup>

とされる。アマチュアで開催する世界相撲選手権などがそれにあたると言える。これは各国の格闘競技者（普段は相撲とは別の競技をしている）が相撲のいたって簡単なルールに基づいて試合を行うものであり、「土俵上で展開された光景に対し、相撲ファンの多くは『これが相撲か？』という驚愕と疑念を覚えたであろう」<sup>13</sup>という相撲である。2.1でみた、勝敗を明らかにするスポーツの試合の目的や、勝利の追求という原理は、純粹にそれを表現すればするほど、この層に関係が深いといえる。

第三層は

ルールには明示されていないが、実際に力士たちの土俵上の競技形態を律している、『相撲の型』と呼ばれる技術体系であり、いわば技術的な意味での『相撲らしさ』を表現した層である。例えば、立合いは低い体勢から踏みこんで当たり合うとか、上手



を浅く引き差し手をかえすのが『四つ相撲の型』だとか、引いたり叩いたりせず前へ出て勝つのが『いい相撲』だとかいうのがそれである<sup>14</sup>

とされる。

またそれは、「第二層の上での長年にわたる試行錯誤と淘汰の結果、一定の合理性を持った技術体系として構築されたもの」<sup>15</sup>である。2.3で確認した大相撲のスポーツ的要素は、この層に強く表れているといえるだろう。

最後に第四層は

格闘競技としての要素以外の、『相撲』を装飾するさまざまな文化装置である。たとえば四本柱であるとか、力士や行司・呼出しの装束であるとか、太鼓・拍子木の音色などによって表現される、『相撲情緒』である<sup>16</sup>

とされる。

以上のように、大相撲を複層的なものとしてとらえれば、スポーツである要素も文化である要素も、どちらも欠かせないものとして大相撲を構成していることがわかる。八百長の是非を問うことは、大相撲はスポーツか文化か二者択一を迫ることと同じではない。



3.1 は、主文に対し、引用文（網掛け部分）の割合が多いので注意が必要。自分の考察が「主」であり、引用は「従」となるようにしよう。

### 3.2 大相撲がスポーツであることと文化であることは排他的問題ではない

擁護派は文化装置としての大相撲を重視しており、2.1で確認したスポーツの目的を大相撲が追求しようとすることによって、勝敗に関係のない部分が今後蔑ろにされることを危惧するのである。しかし大相撲はそのようなスポーツを指向するのだろうか。仮に、勝敗の決定や勝利の追求という原理のみを純粹に目指す相撲があったとして、それは第二層の相撲として表れることになる。この層にとどまる相撲は相撲に見えないものであり、決して大相撲ではない。2.3で考察した、大相撲が指向するスポーツとしての要素は、第三層にこそあるのだといえる。

つまり八百長を排除することは、大相撲の第三層を涵養するという方向を目指すのであって、それは第二層の、とても相撲とは思えない競技に陥ることとはまったく別の問題である。文化装置を保守することは、もともと八百長の是非とは関係がない。

論  
理  
展  
開

結  
論

### 4. おわりに

八百長の是非を問うことは、大相撲がスポーツか文化かを排他的に問うことと混同されがちである。しかし大相撲とは自ずと、文化的要素もスポーツ的要素も複層的に含んだ存

在である。一方では八百長を排して勝負の質を高め、相撲の技術を磨いていき、一方では文化装置としての部分を保護・継承していくことは、決して対立したベクトルではないのである。技術的な相撲らしさの追求と、文化的な相撲らしさの両方があつての大相撲であり、両者のバランスを取りながら発展していくことは、十分に可能なことではないだろうか。

実績ある力士出身者のみで構成される、いわば身内である日本相撲協会も「対八百長で増員」<sup>17</sup>など、八百長根絶への動きを見せている。今後はそうした動きとともに、文化装置部分の継承も大切にしていくことが、大相撲発展のために一層重要であると考えらる。

#### 【引用文献リスト】

<sup>1</sup>「八百長相撲」疑いメール 元春日錦ら4人の携帯 勝ち星売却か。読売新聞。2011-2-2、夕刊、p.11。ヨミダス歴史館、<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>、(参照 2013-11-13)。

<sup>2</sup>玉木正之。“大相撲、「八百長」でなぜ悪い?”。Camerata di Tamaki。  
[http://www.tamakimasayuki.com/sport/bn\\_170.htm](http://www.tamakimasayuki.com/sport/bn_170.htm)、(参照 2013-11-13)。



Web上の情報を引用する場合は、内容の吟味はもちろんのこと、そのサイトが信頼できるものかどうか、可能な範囲で確認しよう。

<sup>3</sup>川谷茂樹。“スポーツマンシップについて(2)”。スポーツ倫理学講義。ナカニシヤ出版、2005、p.54。

<sup>4</sup>川谷茂樹。“スポーツマンシップについて(2)”。スポーツ倫理学講義。ナカニシヤ出版、2005、p.62。

<sup>5</sup>川谷茂樹。“スポーツマンシップについて(2)”。スポーツ倫理学講義。ナカニシヤ出版、2005、p.63。

<sup>6</sup>中島隆信。“力士は会社人間”。大相撲の経済学。東洋経済新報社、2003、p.18。

<sup>7</sup>中島隆信。“力士は会社人間”。大相撲の経済学。東洋経済新報社、2003、p.7-21。

<sup>8</sup>中島隆信。“角界の構造改革”。大相撲の経済学。東洋経済新報社、2003、p.169-187。

<sup>9</sup>川島幹之。スポーツ小咄:絶妙な取り組み解説に三賞。朝日新聞。2006年1月25日、朝刊、茨城全県版、p.30。聞蔵II ビジュアル、<http://database.asahi.com/library2/>、(参照 2013-11-13)。

<sup>10</sup>新田一郎。相撲の歴史。講談社、2010、p.309-319。

<sup>11</sup>新田一郎。相撲の歴史。講談社、2010、p.309。(引用文の丸括弧内はレポート執筆者による補筆)

<sup>12</sup>新田一郎。相撲の歴史。講談社、2010、p.313-314。

<sup>13</sup>新田一郎。相撲の歴史。講談社、2010、p.310。

<sup>14</sup>新田一郎。相撲の歴史。講談社、2010、p.310。

<sup>15</sup>新田一郎。相撲の歴史。講談社、2010、p.310。

<sup>16</sup>新田一郎。相撲の歴史。講談社、2010、p.310。

<sup>17</sup>監査委員、土俵正せるか。朝日新聞。2011年5月11日、朝刊、p.3。

#### ---【参考文献リスト】---

竹内誠。相撲の歴史。財団法人日本相撲協会相撲教習所、1993、62p。

熊谷宗吉。ハッケヨイ残った。東京新聞出版局、1994、226p。